

FW2023名場面集②

都内の学生 織都を彩る

今年の桐生ファッションウィーク（FW、10月27日～11月5日）では、東京都内の大学に通う学生たちがさまざまな場面で作品展やイベントに参加し、織都の盛り上げに一役買った。ファッションを学ぶ学生は桐生の織物を独自の感性でとらえ、新たな活用を提案。建築家の卵らはユニークなワークショップで子どもたちと街を結び付けた。独自の社会貢献のアイデアを持ち込んで参加を志願した学生も現れ、桐生の産業と文化を発信するFWはさらなる広がりを見せた。

ファッション専大 2人が卒業制作展

広がる可能性

古い着物をアップサイクルした洋服を展示する前田さん（10月29日、有鄰館で）



和装とストリートファッションを融合させた仲西さん（10月29日、有鄰館で）



街角のいろいろなものを測るワークショップで子どもたちを楽しませる鈴木さん（3日、糸屋通りで）



桐生織で作ったきんちゃく袋の売り上げでモロッコ地震の被災地支援に取り組む清水さん（3日、桐生織物記念館で）



桐生産地を舞台にしたセミナーを開講してきた国際ファッション専門学校（東京都新宿区）の4年生、前田風咲さん（23）と仲西美波さん（21）は、FWの一環として有鄰館で開かれた「桐生テキスタイルマンズ」（KTM、10月28～29日）で卒業制作を出展した。

昨年続いてKTMに参加した前田さんは、古い着物を洋服にするアップサイクルのビジネスプランを発表。ブランド「nagiki mono（ナギキモノ）」を設立し、着物の柄を大胆に生かしたワンピースやスカートを発表した。

「ブレインディング着物をもっと循環できたら」と、今後も桐生と関わり

法政大大学院建築デザイン研究科の鈴木秀太郎さん（24）は、3日に開かれた歩行者天国イベント「糸ヤ通りいらっしやいませ」の中で、子ども向けのワークショップ（WS）はかって・かいて・糸ヤ通りを開いた。

高崎市出身の鈴木さんは、桐生市新里町の建築家、根岸陽さんとの縁で桐生との関わりを深め、糸ヤ通りでのWSは2度目。来春の就職後も「引き続き桐生と関わり続けたい」と話している。

中央大総合政策学部4年の清水元さん（24）は、3日に開かれた桐生織物記念館の日の一角で、「桐生織×被災地支援」と銘打った企画を持ち込み、自ら志願して初出店した。

桐生織の帯地で作ったオリジナルのきんちゃく袋を限定13点製作し、1個1万2000円で販売。その売り上げを9月のモロッコ地震の被災地支援に充てるという、産業振興と災害復興を組み合わせたアイデアだ。

太田市出身の清水さんは「モロッコの被害を知り、何かできないかと思った。友人の家が桐生織の仕立てを営んでおり、地元伝統産業である桐生織を盛り上げたい思いもあった。かつて日本経済を支えた桐生織を、被災地復興の象徴として役立てられたら」と熱い思いを語り、来館者に積極的に売り込んでいた。

法大の鈴木さん糸屋通りでイベント

中大の清水さん桐生織で慈善活動

参加した子どもたちは「測る」「描

自分の手や足の長さを測った後、街角の看板や標識、構造物などを計測してもらい、それらを実寸通りに模造紙に書き写すという遊びで、日本建築学会のWSコン

で優秀賞に輝いたプログラム。

桐生織の帯地で作ったオリジナル

の売り上げを9月のモロッコ地震の被災地支援に充てるという、産業振興と災害復興を組み合わせたアイデアだ。

太田市出身の清水さんは「モロッコの被害を知り、何かできないかと思った。友人の家が桐生織の仕立てを営んでおり、地元伝統産業である桐生織を盛り上げたい思いもあった。かつて日本経済を支えた桐生織を、被災地復興の象徴として役立てられたら」と熱い思いを語り、来館者に積極的に売り込んでいた。